

エコキャップ運動 テキスト 2

エコキャップ運動と社会貢献



NPO法人
エコキャップ推進協会

エコキャップ運動テキスト目次

* エコキャップ運動と社会貢献 *

雇用創出の意義	2
エコステーション設置プロジェクト	3～5
エコファクトリー 高齢者雇用の実践	6
地球の有限な食物・自然・石化燃料について考えよう	7
子ども食堂の運営	8
宮阪博己氏の提言	9、10

雇用創出の意義

エコキャップ推進協会の初代理事長(故)笹森清氏は、「この運動を通じて多くの雇用創出ができる」「企業の一番のCSRは雇用を生むことだ」と言っていました。さすがに連合の会長までされた人物の発言だと私は多いに感化されました。具体的な事業計画は、障がい者・高齢者の雇用ということで、エコステーション・エコファクトリー構想を推進することになりました。何事も0から1を創うことは簡単な事ではありませんが、環境NPOである当法人の重要な使命だと感じています。

知的障がい者の雇用の現状

知的障がい者の方々の就労状況はどうかというと、B型作業所で1か月15000円程度の賃金、A型作業場で6から7万程度の賃金で、特例子会社や一般企業に就労できる知的障がい者はほんの一部であることが現実です。エコキャップ推進協会が推進する障がい者の雇用創出は、知的障がい者であっても、どこよりも高い賃金で働く環境を創うことにあります。

高齢者雇用の創出

少子高齢化社会を迎えて、年金だけで老後を暮らすことは無理な時代になってきています。しかしながらシニア世代は、豊富な経験とコミュニケーション能力の高さから、即戦力として迎えることができます。

日本の少子高齢化は、日本の世帯収入と支出のバランス・住宅事情・貧富の差による二極化・子ども一人を学校に行かせる経済的負担などが原因と言われています。

それは高齢者を支える年金や福祉にも大きな影響を与えます。

中国でも一人っ子政策の影響で少子高齢化社会になってきました。昨年一人っ子政策を見直し、2人まで良いことになりましたが、やがて日本と同じ道をたどると思います。

この問題は奥が深く、独居老人や老老介護などその他の問題もあります。

誰もが生涯現役でありたいと望んでいます。そのためにも第二の人生を活かせる職場を創う必要があると思います。

エコステーション設置プロジェクト

エコキャップ推進協会では、キャップを高品質な再生プラスチックとしてリサイクルするために必要な分別、異物除去などの作業を行う「エコステーション」を全国に展開しています。

この「エコステーション」は、地域の知的障がい者作業施設・企業の特例子会社などと連携して、障がいを持つ方々の雇用を創出しています。

エコステーションでは、金属やキャンペーンシールなどの異物除去作業や、キャップの色別の分別作業、搬送効率を上げるための破砕作業などを行っています。

キャップのリサイクルを進める際に必要となる様々な作業工程は、障がいの等級に関係なく、個々の作業員の適性に合わせた作業を行います。

エコステーションで使用される破砕機は、障がい者の作業の安全を重視し、安全対策が施された機器を、メーカーと共同開発しました。

エコステーションは障がい者の雇用創出を行い、地域のエコキャップ回収拠点として、また近隣の学校・商店街等と連携したキャップ回収モデルの事例として注目されています。

このエコステーションの全国展開により、多くの障がい者の雇用創出を実現しています。



エコステーションは、市民の皆様から提供頂いたキャップの異物除去作業などを行う、当協会より認定されたエコキャップの地域集積所です。

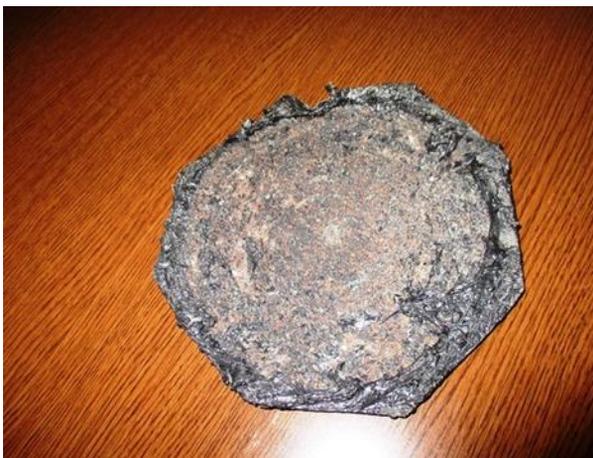
知的障がい者施設との連携がリサイクルを推進する



左写真 メッシュ



中写真 シールを剥がさないメッシュ 20分後



右写真 シールを剥がしたメッシュ 8時間後

エコキャップ推進協会は、発足当初より障がい者に対する取り組みをしようと、理事会で話し合ってきました。初代理事長の笹森清氏の「この運動を通じていろんな雇用を具現化できる。企業の最大の社会貢献は雇用創出すること」という言葉が、障がい者・高齢者雇用の具現化に繋がってきています。

キャップの異物除去、シール剥がし、色分別、素材分別の作業は、リサイクルを行う中で最も重要な過程なのです。これらの作業は、再生プラスチックの素材の優劣を決めてしまいます。

左上の写真は、ペレットにする工程で使用されるメッシュです。これに原料を通します。

シールが貼ってあると20分程度で左中ほどの状態のようになります。そうすると1度機械を止めて、メッシュを交換するのですが、シールを剥がしてあると左下の写真のような状態になるの一日1回程度の交換(約8時間)で作業を進めることができます。



シール剥がしの丁寧な作業が品質を高めます

このように、知的障がい者の丁寧な作業が、再生素材のクオリティーを高めるだけでなく、障がい者の安定した雇用を創出しています。

キャップの異物除去・シール剥がし・色分別が必要なのは、再生素材を必要とする企業のニーズに対応する為です。

白色のキャップは主に家庭電化製品の白物家電等に使用され、その他の色のキャップは土木用品・自動車部品などに使用されます。

プラスチックの破碎も、平均して10mmアンダーを基本として、異物(例えばラベルのフィルム等)が混在するとその価値は廃プラスチックとして扱われて、取引できないのが現状です。



基準となる10ミリ

基準より大きい

フィルム等混在価値なし

エコキャップ運動で循環型社会を構築するためには、全国の加工工場が一定のルールで破碎を実施して、再生素材を提供できる体制が急務です。

その為にも「エコステーション・エコファクトリー構想」で標準的な再生素材を、全国で作ることができる基盤整備を行っています。

エコキャップ運動の、このような基盤整備も非営利活動の一環であり、メーカーが再生素材を安心して購入することのできる基準を作ることも、大きな仕事なのです。



エコファクトリーは、市民の皆様から提供頂いたキャップのリサイクルと製造を行う、当協会より認定された工場です。

NPO 法人 エコキャップ推進協会

エコファクトリー 高齢者雇用の実践

ここでご紹介する株式会社エコサービスは、キャップの回収とエコステーション(障がい者施設)との提携、分別、異物除去、シール剥がしの済んだキャップをチップにする仕事をするシニア世代だけ(60歳以上)の会社です。

現在、同様のシステムを東名阪を中心に展開しています。

エコキャップ運動は全国に広がることで、送料の負担の問題を解決する必要がでてきました。

シニアチームは、回収以外にエコファクトリーで
砕作業を行いチップにします。



破砕されたチップは、フレコン(専用袋)で保管され、次のペレット工場に移送され、その後メーカーで再生品化されています。



全国から提供されるキャップの無料回収を実現するためには、エコファクトリー・エコステーション構想の実現が不可欠です。

エコステーションで回収されたキャップは基準に従って破砕されます。キャップのままですと体積が大きい為高いコストがかかりますが、破砕することによって効率よく移送できます。

小中学校・地域・企業団体・市民の皆様から提供されたキャップは障がい者の雇用を生み、シニア世代の雇用を生んでいます。

このように善意がバトンタッチされて継続可能な循環型社会を実現しようとしています。

地球の有限な食物・自然・石化燃料について考えよう

食べる物に困っている国と日本のフードロスの問題、森林伐採による環境の変化、石化燃料から自然エネルギーへの移行などを、世界中で考えなくては、ならない時代となっています。

下の図は1980年代から2008年頃のデータですが、現在9年経過して、日本人と同じ生活を世界中の人間が行うと(食料・自然破壊・エネルギー問題の解決)、地球が2.4個分必要とされています。

地球が作り出す食べ物
地球が作り出す木材
地球が作り出す燃料



人間が食べる食べ物
人間が使う木材
人間が使う燃料

1980年代中頃 ~ 現在

ぼくらは今、地球1.3個分の資源を使っている
「2030年代には地球2個分の資源が必要になる」

世界自然保護基金の発表(2008年10月29日)

このまま地球温暖化の問題も解決しないと、日本でも80cmから1mの海面上昇があるといわれています。
東京や横浜などの大都市でも、標高が低い地域は水没するといわれています。

子ども食堂の運営

「キャップご提供者のみなさんが身近で見える形」での社会貢献活動へと、路線変更させていただいています。エコステーション(障がい者雇用創出)、エコファクトリー(高齢者雇用創出)は、順調に全国にネットワーク化しています。新たな試みとして近畿第一ブロックから「子ども食堂」の運営をスタートさせています。



子どもたちが始めた運動を地域の大人が支えていくこと。そして貧困や医療支援で苦しむ子どもたちに還元されていくことが重要ではないでしょうか。幼児期・少年期に健全な心と身体を育成することは大切です。かつての日本は戦後復興の経験をしてきました。国民全体が貧しく、神武景気で国民の生活環境も良くなった時代です。現在はどうでしょう？一流企業に入ってもリストラされて住宅ローンも支払えず、貧困家庭になる2極化の時代です。



宮阪博己氏の提言

この度のブロック制で、近畿第一ブロックをお任せすることになりました宮阪博己氏をご紹介します。

宮阪氏は中学生の少年期に父親(39歳)を亡くされ、母親に3人兄妹の長男として育てられました。お父様は生前中学の教員をしておられた頃、学力についていけない子や貧困家庭で引きこもりの子が多いある村に、就業後無償で教えに行っていました。その父親の姿を見て宮阪氏も高校卒業後、大阪で仕事に就かれてすぐにボランティアに参加されました。昭和51年から(旧)大阪ボランティア協会に登録され(旧)聖母整肢園に毎週水曜日にボランティアスタッフとして障がい者男子の入浴ボランティアをスタート。いろいろな事例、障がい児問題や貧困家庭問題などを解決しようと、起業をすることを決心。まずは街中でゴロゴロしている子どもたちに仕事を作ろうとポケットティッシュの配布会社を設立。昭和60年代当時に時給1100円以上を渡していたそうです。大阪・名古屋で総勢60名の子どもたちが仕事をすることの意義を学び、その子供たちが社会人になってからも、彼らは多方面から現在の宮阪氏を支えているそうです。宮阪氏は国内の子ども支援だけでなく、17年前からアフガニスタンの支援を続けています。アフガニстанは人類の運命を決める地点と呼ばれています。それは世界のケシの90%が栽培されている場所であり、麻薬のヘロインが作られているからです。そこに育つ子どもたちに理想とする人生はありません。宮阪氏はNGO宝塚アフガニスタン友好協会を通じて、さらにアフガニスタンに医療診察所を開設して医療活動を続けているNPO法人カレーズの会にもずっと支援を続けています。

「直接の姿が見える支援が大切であって、支援金がほとんど運営費で消えていないか、表に出てこない陰に隠れた反社会的組織に持って行かれていないか、真の寄付を求めます。団体の中には私たちが知ることができない霞のかかった世界もあります。みなさんが責任ある支援者になることが大切であって、それがこれからの安定した社会を築く方法の最低条件だと思います。」

「これまで使われてきた支援金が有効に使われ、健全な組織が構築されていれば、すでに世界は変わっているはずです。」との宮阪氏のコメントです。

さて、国内の話に戻りますが、宮阪氏は平成11年度より大阪の釜ヶ崎(西成区)にあるカトリック系の「出会いの家」に(旧)大阪ボランティア協会を通じてホームレスの方への炊き出しのお手伝いを始められました。平成20年からはアメリカのリーマンショックの影響で大阪の難波にも多数のホームレスの方が集まったので、365日年中無休の炊き出しが開始されました。今まで行政の支援を受けずに、宮阪氏の稼ぎと知人の支援で今でも続けておられるようです。お米だけはカトリックの「出会いの家」からたくさん受け取ることが出来ているそうです。

私どもエコキャップ推進協会と宮阪氏の出会いは、2年前宮阪氏が(社団)イエローリボン(監事)を立ち上げられ、障がい者B型作業所でのキャップの異物除去、色分別、シール剥がし作業をしたいとのお話がきっかけです。現在では8か所の障がい者施設(近畿地区)でこれらの作業を行っていただいています。

宮阪氏はACP株式会社も管理されており、自動車の中古部品(事故で傷が入ったが使える部品)を近畿圏の500社の自動車板金塗装会社から買い取ってその部品を清掃する作業を、障がい者就労支援施設に取り次ぐ担当もしています。そこで使用できないバンパー(キャップの成分に近い)やポリプロピレン精製品は、キャップを粉砕する機械でチップにして資源リサイクルをしています。

すべてが満点のシステムを構築しています。以上のことから今回近畿第一ブロックのブロック長に宮阪博己氏を抜擢させていただいたことをお知らせいたします。ポリオ撲滅により発展途上国の支援体制も変わってきています。

「現在、国内でも6人に1人が貧困家庭と言われています。単に食事ができないだけでなく、相談する大人がいないことが問題なのです」と宮阪氏は言っています。国内の貧困対策を一NPOが解決することはできませんが、その一助となることはできます。

近畿第一ブロックの「こども食堂」の運営ノウハウは15年に及んでおり、生活保護世帯よりも、シングルマザーで頑張っている非課税世帯の方々の方が、生活が困窮している場合が多いそうです。日本全体が貧しかった時代を経験している世代の方は、現在の二極化した収入格差が学歴格差を生んでいることがわかりだと思えます。

貧困は連鎖して負のスパイラルを構築していきます。現在、宮阪氏は関西シェフ同友会の事務局長もしておられます。宮阪氏の考え方や意見に賛同し、今後エコキャップ推進協会は、各ブロックと連携して子ども食堂事業も展開していきます。